個人空間に及ぼす性と支配性の影響

青 野 篤 子

The effects of sex and dominance upon personal space

Atsuko Aono (30-1, Tokushige, Imabari 794)

This experiment was conducted to investigate the effects of differences in sex and dominance on personal space. Fourty male and 40 female students were divided into high- and low-dominant groups and assigned to a male or female approaching person. Interpersonal distance between a subject and the approaching person was measured at eight orientations around the subject's body. It was found that interpersonal distance decreased as the bodily orientation shifted from the front to the rear. Also, males' personal space was greater than females'. Finally, the effect of dominance was not found except for two interactional effects.

Key words : measurement, personal space, interpersonal distance, sex norm, dominance.

我々は他者との相互作用においてある一定の距離を保つ傾向がある。このことは、我々が自分のまわりに、自分のものと感じ他者の侵入を許さない領域をもっていることを示している。このような領域を個人空間 personal space とよんでいる。

Little (1965) によると、個人空間は、“他者との相互作用の大部分が行なわれるところの、直接に個人をとりまく領域である” (p.237) と定義されている。また、Sommer (1959) はこれと類似のテリトリー概念との相違点として、(a) 固定した地理的關係点をもたないこと、(b) 携帯が可能なこと、(c) 状況によって拡大縮小することの3点をあげている。言うならば、個人空間はある個人と他者との間にあって緩衝帯として機能する領域である。

一般に、個人空間は正面で最も広く、横・後方へと正面からずれるに従って狭くなる (田中, 1973)。これは、他者の侵入に対する許容度が身体の方角によって異なることを意味する。個人空間がこのような異方性を有することを考えれば、あらゆる方向で他者との距離を測定する必要がある。また、個人空間の定義に従えば、被験者を固定した被接近事態で測定するのが望ましいと思われる。

こういった個人空間の大きさを規定する要因にはどんなものがあるだろうか。まず、性の要因があげられよう。従来の研究では、一般に、女性同志が相互作用を行なう距離は男性同志のそれより小さいという結果が得られている (青野, 1980; Bauer, 1973; Baxter, 1970; Tennis & Dabbs, 1975)。また、女性は相手が女性の場合より男性の場合の方が大きい距離をとる (Dosey & Meisels, 1969)。これらの事実は、女性の個人空間が男性の個人空間より小さい (侵入されやすいこと) を意味するもの

であろうか。この点について、被接近事態を用いて明確にしたい。

次に、支配性ないし地位の要因が考えられる。Frieze & Ramsey (1976) によると、支配性とは他の個体に及ぼす統制力・影響力であり、動物界では支配性の高い個体ほど高地位を占め、より大きな個体空間を所有しているという。また、人間の社会行動についても、より大きい空間やより快適な空間が地位の高い人に与えられる事実が観察されている (Hall 国弘訳, 1966)。Barash (1973) が個人空間に及ぼす地位の影響を検討したところ、相対的に地位の低い者の方が地位の高い者に空間を譲り渡すことが明らかになった。ところで、人間社会においては地位は社会的位置の序列であって、パーソナリティ特性としての支配性がそのまま反映されたものとは言い難い。そこで、本研究では、第2の要因として支配性をとりあげ、個人空間との関係を検討したい。

方 法

要因計画 本研究は、被験者の性×被験者の支配性×接近者の性という三元配置の要因計画で行なわれた。従属変数は8つの方向での二者間の距離である。

被験者 心理学を受講する大学生 (男性 90 名, 女性 100 名) にパーンルーター人格目録日本版 (Kobayashi-Bernreuter Personality Inventory, KBPI) を実施し、男女別にそれぞれ高支配群 20 名, 低支配群 20 名, 合計 80 名の被験者が抽出された。その際、難聴の者と左利きの者は除外された。

接近者 被験者とは未知の男子学生 (身長 172 cm) と女子学生 (身長 153 cm) が1名ずつ、接近者として選ばれた。

被験者には、相手の人も同年齢の学生であるとの情報

が与えられた。それぞれの被験者は男性接近者、女性接近者のいずれかに割りあてられた。服装によって印象が大きく変わることのないよう、接近者が実験中に着用する上衣は同一とされた。また、接近者は、歩幅・歩調などをできるだけ一定にするように、顔の表情もあまり変えないように訓練を受けている。

手続き 実験上の手続きは田中 (1973) に従っている。実験室の床に中心から 8 つの方向 (45 度間隔) に 2 m の長さのビニールテープをはり、1 cm ごとに目盛をうって置く。実験室の明るさを一定にするために暗幕と蛍光灯を使用した。

実験者は被験者を実験室に迎え入れ、実験室の隅のテーブルに着席させる。接近者は被験者の視野に入らない場所で待機させておく。被験者が着席したところで次のような教示がテープレコーダーで与えられる。

“ふつう、人は他の人との間にある距離をとっています。ですから、知らない人にあまり近くに寄られると不快な感じを受けるものです。この実験では、知り合いでない人に対してどのくらいの距離をとっていれば気づまりな感じや不快な感じを受けないものかということを調べたいと思います。床を見てください。8 つの方向にテープがはってあって 1 から 8 まで番号がふつてありますので、その中心に立っていただきます。その 8 つの方向のどこからか同い年の男子 (女子) 学生があなたに近づいてゆきます。そこで、その時に近すぎて気づまりだとか、落ちつかない、あるいはいやな感じだとか感じ始めたところで“はい”と合図をしてください。そうすれば相手は止まります。一度止まったあとで、近寄りすぎているともう少し近くてもよいと感じましたら、遠慮なくそう言って相手の位置を直してください。なお、相手がどの方向から近づいてくる場合にも正面を見ていて、正面からの場合には必ず相手の目をそらさずに見ていてください。

教示が与えられると、被験者は 8 本のテープの中心に立ち、一方、接近者は実験者が指示した番号のテープの端に立つ。接近者は、被験者が合図をした所で止まり、自分のつま先の位置に印をつけておく。指示される方向の順序はランダムで、各方向につき 1 回ずつの測定が行なわれる。正面測定の際に被験者が目をそらした場合には、再度測定される。

結 果

被験者の性×被験者の支配性×接近者の性の 3 要因に被験者内変数として方向の要因を加え四元配置の分散分析を行なったところ、方向の主効果のみ有意で ($F_{(7,504)} = 4.52, p < .01$)、やはりここでも、個人空間が異方的構造をもつことが確認された。方向別・男女別の距離は Fig. 1 に示す通りである。男女をこみにした距離に関

して、左斜め後と真後との差が有意でなかった他はすべて有意差が認められ、個人空間は正面が最も広く、横、後方としだいに狭くなると言える。

次に、方向別に三元配置の分散分析が行なわれた。その結果、正面、左斜め前、右斜め前でのみ有意な効果が見られた。正面と右斜め前では被験者の性の主効果が有意であり (Table 1, 2)、これらの方向で男性は女性よりも他者と大きい距離をとることが明らかにされた (Fig. 1 参照)。右斜め前では被験者の性と支配性との交互作用も有意であり、支配性の低い被験者で上のような男女差が強く現われることがわかる (高支配群, 77.5 vs. 76.7; 低支配群, 89.3 vs. 66.6)。こういったことから、全般的に、個人空間の前方は女性より男性の方が大きいと言えよう。

また、Table 3 から明らかなように、左斜め前では接近者の性の主効果および接近者の性と被験者の支配性との交互作用が有意であった。すなわち、接近者が男性の場合より女性の場合に対人距離が小さくなると言えるが (81.0 vs. 71.0)、これは支配性の高い被験者での差によるものである (高支配群, 85.4 vs. 64.7; 低支配群, 76.6 vs. 77.4)。

考 察

本研究で明らかになったのは、まず、個人空間は正面が最も広く、正面から遠ざかるにつれて狭くなること、つまり個人空間が異方性をもつことである。これは、Argyle & Dean (1965) の均衡理論からも推論されよう。すなわち、それは、親密さが一定ならばそれを伝達する様々なノンバーバルコミュニケーションの総和も一定であるから、その要素の一部分がある方向に変化するとの別の要素は逆方向に変化するというものである。ここでは、視線の交錯 eye-contact 頻度の減少に伴って距離が増大したと考えられる。

個人空間に影響を及ぼす他の要因も検討されたが、有

Fig. 1. Mean distance as a function of sex of subject×angle.

Table 1
ANOVA of distance at the front

Source	MS	df	F
Sex of subject (A)	5 494.61	1	6.24*
Dominance of subject (B)	588.61	1	.66
Sex of approaching person (C)	227.81	1	.25
A × B	2 940.32	1	3.34
B × C	505.02	1	.57
A × C	2 070.62	1	2.35
A × B × C	0.60	1	.00
Error	879.96	72	
Total		79	

* $p < .05$

Table 3
ANOVA of distance at the far left

Source	MS	df	F
Sex of subject (A)	1 170.45	1	2.38
Dominance of subject (B)	76.05	1	.15
Sex of approaching person (C)	1 980.05	1	4.03*
A × B	1 201.25	1	2.45
B × C	2 311.25	1	4.71*
A × C	6.05	1	.01
A × B × C	6.05	1	.01
Error	4 90.23	72	
Total		79	

* $p < .05$

意な効果が見出されたのは個人空間の前方のみであった。まず、性の要因についてであるが、前方では男性の個人空間は女性の個人空間より大きいという結果が得られた。これは従来の諸研究の結果と一致するものである。Frieze & Ramsey (1976) はこれを性規範の影響によるものと解釈している。すなわち、一般に女性はひかえめであることが望ましいとされ、一方男性は能動的であることが望ましいとされているため、個人空間の使用に上述のような差が生じるというものである。

接近者の性の要因は左斜め前で有意であり、左斜め前では男性の接近より女性の接近の方が許容されやすいと考えられる。Pedersen & Heaston (1972) も同様の結果を得ている。このことも社会に存在する性規範の影響と考えることができよう。一般に、女性は男性よりも脅威を及ぼすことの少ない存在としてとらえられている。ところで、右利きの者にとっては身体の左側が弱点になっているので、左斜め前でこのような差が現われたのでは

Table 2
ANOVA of distance at the far right

Source	MS	df	F
Sex of subject (A)	2 761.25	1	4.75*
Dominance of subject (B)	12.80	1	.02
Sex of approaching person (C)	1 566.45	1	2.69
A × B	2 398.05	1	4.13*
B × C	266.45	1	.45
A × C	145.80	1	.25
A × B × C	180.00	1	.31
Error	580.51	72	
Total		79	

* $p < .05$

ないかと思われる。

パーソナリティ特性としての支配性の要因は何ら有意な効果をもたらすものではなかった。有意な交互作用効果も容易に解釈できるものではない。動物界では個体の地位（支配性）が高ければ高いほど個体空間も大きいこと、人間社会でも地位に応じた空間所有が認められることは前述のとおりである。ただ、人間社会での空間所有は、よりマクロな空間に関して制度的に行なわれていると言えよう。すなわち、地位の高い者はより広い部屋、家、庭などを所有する傾向にある。このために、逆に、個人の特性（支配性）に応じた空間要求は抑制される方向にあるのかもしれない。しかし、Fromme & Beam (1974) は支配性が高いほど相手に接近するという結果を得ており、接近距離と被接近距離との相違も含めて今後の検討が必要であろう。

引 用 文 献

- 青野篤子 1980 対人距離に関する発達の研究 実験社会心理学研究, 19, 97-105.
- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye-contact, distance, and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304.
- Barash, D.P. 1973 Human ethology—personal space reiterated. *Environment and Behavior*, March, 67-72.
- Bauer, E. A. 1973 Personal space : a study of blacks and whites. *Sociometry*, 36, 402-408.
- Baxter, J. C. 1970 Interpersonal spacing in natural settings. *Sociometry*, 33, 444-456.
- Dosey, M. A., & Meisels, M. 1969 Personal space and self protection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 11, 93-97.
- Frieze, I. H., & Ramsey, S. J. 1976 Nonverbal maintenance of traditional sex roles. *Journal of Social Issues*, 32, 133-142.

- Fromme, D.K., & Beam, D.C. 1974 Dominance and sex differences in nonverbal response to differential eye contact. *Journal of Research in Personality*, **8**, 76-87.
- Hall, E.T. 国弘正雄他訳 1966 沈黙のことば 南雲堂
- Little, K.B. 1965 Personal space. *Journal of Experimental Social Psychology*, **1**, 237-247.
- Pedersen, D.M., & Heaston, A.B. 1972 The effects of sex of subject, sex of approaching person, and angle of approach upon personal space. *Journal of Psychology*, **82**, 277-286.
- Sommer, R. 1959 Studies in personal space. *Sociometry*, **22**, 247-260.
- 田中政子 1973 Personal space の異方的構造について 教育心理学研究, **21**, 19-28.
- Tennis, G.H., & Dabbs, J.M. 1975 Sex, setting, and personal space : first grade through college. *Sociometry*, **38**, 385-394.
- 1980. 6. 30. 受稿, 1981. 1. 24. 受理——